４　学習評価

(1) 学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を育成する学習評価

①　評価することの意味　－指導と評価の一体化－

評価のための評価であってはならない。評価は子どもの成績を付けるものと思われがちである。それは評価の一部の意味であって，全てではない。

「広島の社会科」では，評価の目的を主に次の２点と考える。

１点目は，目標を達成することができたかどうかを図るための評価である。授業は子どもに確かな学力を付けていくためになされるものであり，評価はその力を子どもに付けることができたかどうかを子どもの様子から見取るものである。

２点目は，授業改善の手掛かりとするための評価である。本時の目標を達成することができていたなら，なぜ到達することができたのか，逆に達成できなかったなら，なぜ到達できなかったのかを分析する。子どもの評価を通して自らの授業に対する評価を行い，次時の授業改善を図っていく。一般的には指導と評価の一体化と言われるように，子どもの評価のためだけに評価をするのではなく，評価を授業改善の手掛かりとし，授業力を向上するために活用するのである。

②　「広島の社会科」の評価に対する考え方

評価では，評価規準で示すつけたい力を子どもが習得できたかどうかを「判断基準（評価基準)」に従って判断する。一般に，「十分に満足できる状態」（Ａ)，「おおむね満足できる状態」（Ｂ)，「努力を要する状態」（Ｃ）と３段階でされる場合が多い。しかし「広島の社会科」では，判断基準を一つに絞る。

教師には，「何をこそ教えるのか」を明確にして本時の目標を立て，それを子ども全員が達成できるように授業を行う責任がある。「広島の社会科」では，教師の使命を大事にし，また子ども全員に確かな学力を付けていくことをめざしている。

子どもたちに確かな学力を付けるためには，教師が設定した目標を達成できたかどうかで見取らなければならない。どこまで到達できたかというＡ・Ｂ・Ｃの３段階ではない。教師が意図する目標に達成できたかどうか，それはすなわち子どもに力が付いたかどうかであり，それが授業の本質だからである。

(2) 評価の進め方や手順

子どもに確かな思考力・判断力・表現力を育成し，学習意欲を向上させるための評価の進め方や手順は以下の通りである。

①　単元の目標を設定する。
― 本単元で何をこそ学ぶのか，教材固有の価値を考えながら設定する。

⇩

②　評価規準を設定する。
― 評価規準に盛り込むべきこと（次ページ（3）を参照）を参考に設定する。

⇩

③　評価規準の各観点を単元全体に位置付ける。
― 評価規準を単元構成全体に位置付ける。各時間の評価の目安（○○しているか，できたか）それを何から見取るか（評価資料）を考える。

⇩

④　判断基準を定める。	評価規準を達成できたかどうかが分かる子どもの具体的な姿を想定する。
⑤　到達できない児童に対しての手だてを考える。	目標を達成できそうにない子どもを想定し，どのような手だてを講じるか，具体的に計画する。

(3) 評価規準の設定（評価規準に盛り込むべきこと）

社会科の評価の観点とその趣旨は下のように示されている。

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
社会的事象に関心をもち，それを意欲的に調べ，社会の一員として自覚をもってよりよい社会を考えようとする。	社会的事象から学習問題を見いだして追究し，社会的事象の意味について思考・判断したことを適切に表現している。	社会的事象を的確に観察，調査したり，各種の資料を効果的に活用したりして，必要な情報をまとめている。	社会的事象の様子や働き，特色及び相互の関連を具体的に理解している。

上記の観点の趣旨を踏まえ，さらに，「評価規準のための参考資料」に掲載されている各学年の「評価の観点の趣旨」，各内容の「評価規準に盛り込むべき内容」，「評価規準の設定例」を参考にすることで，具体的な評価規準を設定することができる。

「評価規準の設定例」に記述されている例文は次のようなパターンが用いられているので，実際に評価規準を設定する際に参考にされたい。

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
①　～に関心をもち，意欲的に調べている。 ②　～を考えようとしている。 ～に協力しようとしている。 ～を活用しようとしている。	①　学習問題や予想，学習計画を考え，表現している。 ②　～を（関連付けたり，比較したり，総合したりして）考え，適切に表現している。	①　～について必要な情報を集め，読み取っている。 ②　～にまとめている。	①　～（調べる対象）を理解している。 ②　～（事象の意味や特色，相互の関連）を理解している。

(4) 評価の実際　－単元　第４学年「くらしをささえるごみのしょり」を例に－

ここでは，単元第４学年「くらしをささえるごみしょり」を例に，単元の目標，単元の評価規準を示す。また，具体的な評価例として，学習過程「であう」の２時間目の授業を簡単に紹介し，本時の目標と評価規準・判断基準・手だて，子どものノートの記述をどのように見取っていくのかという評価の実際を紹介する。

①　単元の目標

○　廃棄物の処理が，自分たちの生活や産業と深く関わっていることやそれらが計画的・協力的に進められていることを理解し，地域の環境保全に対する関心をもったり，廃棄物の適切な処理や再利用などに協力しようとしたりする。

○　廃棄物の処理について見学，調査したり，資料を活用したりして調べ，その対

策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを考えるようにする。

② 単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
① ごみ処理について関心をもち，意欲的に調べたり，考えたりしようとしている。 ② 地域社会の一員として，ごみの減量や資源の再利用などの取組に協力しようとしている。	① ごみ処理にかかわる対策や事業について，学習問題や予想，学習計画を考え表現している。 ② ごみの処理に対する対策や事業が地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを自分たちの生活と関連付けて考え，適切に表現している。	① 施設・設備などの観点に基づいて見学・聞き取り調査を行ったり，統計やパンフレットなどの資料を活用したりして，ごみの処理にかかわる対策や事業について必要な情報を集め，読み取っている。 ② 調べたことをノートにまとめている。	① きまりに基づきごみ処理が進められていることや生活や産業とかかわっていることを理解している。 ② ごみ処理に関わる対策や事業は計画的，協力的に進められていること，またそれと地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。

③ 本時の展開 －学習過程「であう」の 2 時間目－

「広島市の人口の変化」と「広島市のごみの量の変化」が分かるグラフを用意する。人口は年々増加していること，ごみの量は年々減少していることがグラフから読み取れる。「人口が増えたのならごみも増えるはず」というのが子どもの素朴な考えであろう。しかし，「人口は増えたのにごみの量は年々減っている」のである。自分の考えとは矛盾する事実から思いや考えをもてるようにする。

④ 評価の実際

ア 本時の目標と評価規準・判断基準・手だて

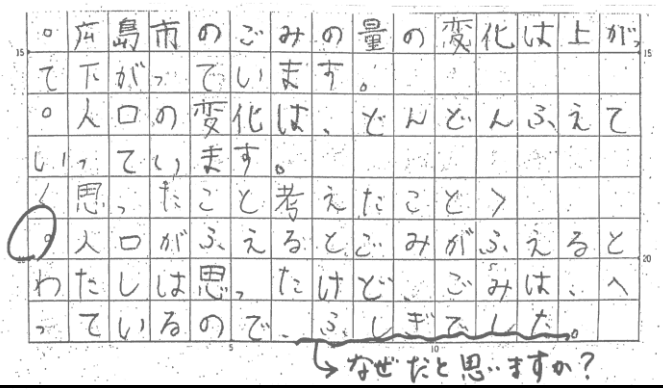
ここでは本時の目標を【関心・意欲・態度】とした場合と【思考・判断・表現】にした場合とに分け，それぞれの目標と評価規準・判断基準・手だてを示す。

	【関心・意欲・態度①】	【思考・判断・表現①】
本時の目標	「広島市の人口の変化」と「広島市のごみの量の変化」の二つのグラフを読み取り，ごみ処理や広島市のごみの量の変化に関心をもつ。	「広島市の人口の変化」と「広島市のごみの量の変化」の二つのグラフから読み取った情報をもとに，学習問題につながる疑問をもつことができる。
評価規準	グラフから分かったことをもとに，思いや考えをもつことができる。	二つのグラフを読み取り矛盾に気付き，学習問題につながる思いや考えをもつことができる。
判断基準	人口が増えているのにごみの量が減っていることに対して，自分なりの思いや考えをもっているか。[ノート・発言]	二つのグラフから気付く矛盾に対して，その原因や理由について自分なりの思いや考えをもてているか。[ノート・発言]
手だて	人口は増えるとごみの量はどうなると思うかと問い，グラフの矛盾に気付けるようにする。	矛盾が起きるのはなぜだと思うかと問い，原因や理由に目が向けられるようにする。

イ　見取りと評価

Ａ児とＢ児のノートへの記述を例に示す。その記述を**【関心・意欲・態度】の場合**と**【思考・判断・表現】の場合**とに分けて具体的に分析・評価する。

Ａ児のノートへの記述



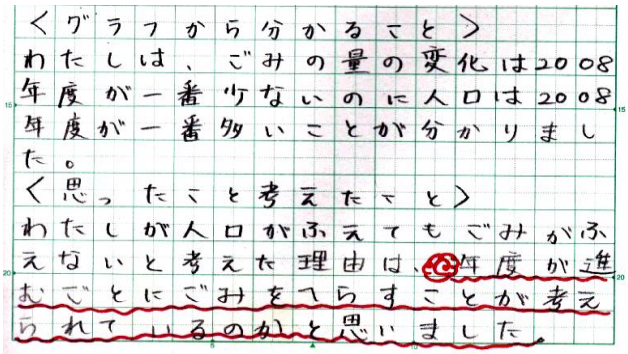
Ａ児のノートへの記述を【関心・意欲・態度】として見取る場合

Ａ児は，「人口が増えるとごみも増える」という自分の思いとは裏腹に，「ごみは（年々）減っている」という事実をグラフから読み取り，それを「ふしぎ」だと思っている。自分の常識とは異なった社会の様子に関心をもっていることが分かる。Ａ児は本時の目標を達成していると考える。

Ａ児のノートへの記述を【思考・判断・表現】として見取る場合

「ごみの量の変化は上がって下がっている」・「人口はどんどん増えている」とグラフから読み取りその二つをつなぎ合わせること，また自分の「人口が増えるとごみも増える」という思いと対比することで，「人口が増えるのにごみの量は減る」という矛盾に気付く。しかし「ふしぎだ」という感想に留まっている。Ａ児は本時の目標を達成できなかったと考えられる。

Ｂ児のノートへの記述



Ｂ児のノートへの記述を【関心・意欲・態度】として見取る場合

「人口が増えてもごみが増えない」ということにグラフを読み取ることで気付いている。Ｂ児もＡ児と同じように，「人口が増えればごみの量も増える」と考えていたのだろう。Ａ児はそれが「ふしぎ」に留まっていたが，Ｂ児はその理由を自分なりに考え「年度が進むごとにごみを減らすことが考えられている」と思いをつづっている。Ｂ児も本時の目標を達成していると考える。

Ｂ児のノートへの記述を【思考・判断・表現】として見取る場合

「ごみの量の変化は」と記述しているので変化に目を向け「2008 年が一番少ない」ことを読み取っている。「人口は 2008 年が一番多い」と記述している。Ａ児と同じように，矛盾に気付いている。Ａ児はそれが「ふしぎ」という感想に留まっている

が，Ｂ児はそれに留まらず，「年度が進むごとにごみを減らすことが考えられている」と記述している。具体的には書かれていないが，制度の改革や人々の工夫や努力によってごみを減らす取り組みがなされたのではないかということを４年生なりに書いている。Ｂ児は本時の目標を達成していると考える。

⑤　授業改善に向けて

○　Ａ児とＢ児の「思ったこと・考えたこと」に学ぶ

Ａ児もＢ児も二つの資料から情報を取り出し,その矛盾に気付くことができている。そしてＡ児は「ふしぎ」という思いを，Ｂ児は「ごみを減らす取組がなされているのではないか」という疑問に発展する思いや考えをもつことができている。

そのような思いは「どのようにしてごみの量を減らしているのか」・「なぜごみの量を減らしていかなければならないのか」などの学習問題へと発展していくだろう。つまり，社会のいろいろな取組を知ったり（「社会を知る」），意味を分かったり（「社会がわかる」)する後の学習へも意欲をもって取り組むことへとつながっていくと考える。

学習の導入段階では，どのような事実を，どのような資料を使い，どのように提示して学んでいくのかは単元全体に関わる大事なことであると学ぶことができる。

○　【思考・判断・表現】の目標を達成できなかったＡ児から学ぶ

「人口が増えるとごみが増える」そこに比例関係が成り立つことは納得できる。しかし実際は異なり，ごみの量は減っている。Ａ児のノートに教師が下線で「なぜだと思いますか？」と指摘して更なる考えを引き出そうとしている。それを本時の中でできたらよかったのだろう。そうすれば，Ａ児はさらに考えを深め，例えば「スーパーマーケットにリサイクル品の回収ボックスが設置されていること」や「子ども会で廃品回収をした経験」など直接的にごみを減らしていくような取組に気付いたり，「分別収集していることが関係あるかもしれない」，「ごみを減らすために市が工夫しているのかも」など考えたりするだろう。子どもに何をどのように考えてほしいのかを具体的に想定すること，話合いの様子やノートへの記述を授業の中でしっかりと見取り，目標を達成するための手だてを講じていくことが必要である。

(5)　成績と評価について　評価を記録として書き残す場合

通知表や指導要録などを作成するとき，子どものノートや成果物などから行った評価を活用する。「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」には，「評価した結果を記録に残す場合では，「十分満足できる」状況（Ａ)，「おおむね満足できる」状況（Ｂ)，「努力を要する」状況（Ｃ）の 3 段階で評価する」と示されている。「広島の社会科」では判断基準を一つに絞っていることからそれを（Ｂ）と考え，（Ｂ）を超えるものを（Ａ）とし，（Ｂ）に到達しないものは（Ｃ）と評価することになるだろう。

＜引用・参考文献＞

○北尾倫彦監修他『観点別学習状況の評価規準と判定基準［小学校社会］』，図書文化社，2011年
○国立教育政策研究所教育課程センター『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善ための参考資料【小学校社会科】』，平成 23 年